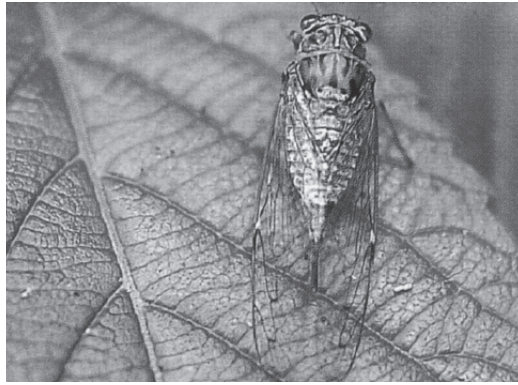


かさまのれきし

第61回



ヒメハルゼミ (雌)



ヒメハルゼミの生息地 (片庭)

片庭の

ヒメハルゼミ

江戸時代の村方の記録に、片庭・楞厳寺の裏山や八幡神社境内の林に生息し、昭和九年(一九三四)十二月に国の天然記念物の指定を受けたヒメハルゼミの記録を見つけ、驚きました。

江戸時代の文化六年(一八〇九)六月、農村部を担当する郡奉行所役人の記録に、「片庭村多蟬、百姓佐惣次・又右衛門裏山にて啼き候」とあります。時あたかも、笠間藩主牧野貞喜が化政改革と呼ばれる政治改革に着手した時期で、江戸時代の村々の記録の中でも特異なことです。それだけに、ヒメハルゼミは笠間藩でも注目されていたと考えられます。

早速、『新訂原色昆虫大図鑑』(北隆館)を繙くと、太平洋沿岸の生息北限として

茨城県片庭とあり、雄の体長は二十四〜二十八ミリメートル前後、雌はやや小振りて産卵管が長く伸びるとあります。上の写真は雌で、産卵管が鮮明です。これは、笠間市文化財保護審議委員の安見珠子先生が片庭で撮影された苦心の作です。シイ(椎)の太木の高い幹や枝で鳴くことが多いヒメハルゼミは、鳴き声が聞こえても姿を見ることが困難といわれる中で、貴重な作品です。今春刊行となった『笠間市の文化財』にも使用させて頂きました。

次いで、私のスクラップから、昭和五年(一九三〇)七月二十七日付け「いはらき」新聞の加藤正世というセミの研究者の寄稿文を探りあてました。その文面では、当時、笠間周辺ではヒメハルゼミを「大蟬」と呼んでいたこと、地元の北山内小学校片庭分教場教員であった堀江廣が、大正四年(一九一五)以降大蟬の調査と保護活動に従事し、その詳細な調査記録を贈られた加藤は感服し、共著の形で学界へ発表する予定と語っています。研究内容を横取りせず、地元研究者を尊重する加藤の姿勢に敬服します。さらに、

明治三十八年(一九〇五)、谷貞子という研究者が「ヒメハルゼミ」と命名、発表したこと、この時期に新潟・福岡・千葉の三県に生息が確認されていたこと、セミの形は細長く、頭部と胸・背部は暗緑色、腹部は褐色で羽は透明であると、先の「昆虫図鑑」にまさる説明が加えられています。

もう一点、地元笠間で注目する資料があります。昭和四年(一九二九)十一月、昭和天皇を水戸市に迎え、茨城県下で実施された陸軍特別大演習の際、笠間稲荷神社社掌塙嘉一郎が作成・献納した『西茨城郡名所旧蹟写真絵巻』に「片庭の大蟬」が収載されています。「コノ蟬ハ椎ノ老樹ニ群棲、一・二ノモノ鳴キ始ムルト一斉ニ鳴キ、ソノ声大トナル。大蟬ノ名ノ起因」と述べています。

国の天然記念物指定を受ける背景には秘められた物語があり、また多蟬・大蟬の呼び名の由来からは日本人の感性がしのべれます。

(市史研究員 矢口圭二)